

和歌における「いとふ(厭ふ)」

——『万葉集』から『新古今集』入集西行・慈円歌へ——

児島由記

一、はじめに

「いとふ(厭ふ)」という言葉には、嫌だと思ふ、この世を避け離れるという意がある。しかし、この「いとふ(厭ふ)」には、和歌において前述の意味のみの用いられ方をされているのだろうか。本稿ではこの「いとふ(厭ふ)」という語の使われ方を検証することとする。その方法として、『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』等を中心に、各々の歌を幾首か採り上げ考察していく。それぞれの時代の歌がどのようにその言葉を探り入れ、詠まれてきたのか。物語、随筆、連歌等の関連もあるが、紙幅の都合で、本論文では言及せず、和歌のみに焦点をあてることとする。

二、『万葉集』における「いとふ(厭ふ)」

『万葉集』(佐竹昭広・木下正俊・小島憲之共著『補訂版萬葉集本文篇、塙書房、一九九八年)(以下同)には「いとふ(厭ふ)」という語を詠んだ歌が八首ある。

その中の七六四番歌は、

大伴宿祢家持和歌一首

百年尔老舌出而与余牟友吾者不厭戀者益友

(巻第四 相聞 七六四)

というもので、百歳になり歯が抜け舌が出て腰が曲がるといった醜態にな

っても、私は「厭わない」と相手への恋情を訴える歌である。この歌の「いとふ」の意味には、恋愛対象を避ける、嫌に思うの意であり、老体になっても慕う相手避けることは無いのだが(あなたの気持ちはどうでしょうかと)、相手に判断を委ねている。

また、二二七三番歌は、

寄花

何為等加君平野厭秋芽子乃其始花乃歡寸物乎

(巻第十 秋相聞 二二七三)

という、萩の花に相手への思いを寄せる恋の歌である。慕う相手に出逢った時の恋情を、反語表現を用いて、「どうしてあなたを厭うことがあるのか、(いや)厭うことなどありえませんか」と詠んでいる。

吉恵哉不來座公何為不厭吾戀乍居

(巻第十一 正述心緒 二二七八)

牟可比為豆一日毛於知受見之可杼母伊等波奴伊毛乎

都青和多流麻豆

右十三首中臣朝臣宅守

(巻第十五 三七五六)

二二七八番歌では、来ない相手の薄情さをつれなく思うが、どうしても嫌いになれないという悲恋に駆られる胸中を詠み、三七五六番歌では、一日も欠かさず顔を見合せていたが、嫌だとは思ってもみなかった、という「伊等波奴」である。これら『万葉集』の恋の歌では、「相手を嫌ではないのだが」という表現、つまり「厭ふ」という言葉を打ち消しする言い方や、反語表現のような打ち消しの強調表現が探られている。

以上のように「厭ふ」を打ち消す表現は、恋の歌に限らない。

詠鳥

霍公鳥厭時無菖蒲纒將為日從此嗚度礼

道和大宰之時梅花新歌六首

宇梅能花 伊都波乎良自等 伊登波祢登 佐吉乃盛波
平思吉物奈利

右十二年十二月九日大伴宿祢書持作

(卷第十 夏雜歌 一九五五)

(卷第十七 三九〇四)

一九五五番歌では(卷十八、四〇三五に重出)、ホトトギスを厭う、つまり嫌う時はない、三九〇四番歌では梅の花を折ることを厭わない、つまり嫌だと思わないのだけれども、というように、対象を「厭ふ」ことを打ち消している。

『万葉集』の「厭ふ」の用例、八首のうち、打ち消し表現が見られるのは七首である。『万葉集』では何故に「厭ふ」という動作を打ち消しにして表現するのだろうか。再度「厭ふ」の打ち消し以降に焦点を絞り、幾首かの歌を探り上げてみることにする。

吾者不厭 戀者益友

(卷第四 相聞 七六四)

不厭吾 戀乍居

(卷第十一 正述心緒 二三七八)

厭時無 菖蒲 獲將為日 從此鳴度礼

(卷第十 夏雜歌 一九五五)

伊登波祢登 佐吉乃盛波 平思吉物奈利

(卷第十七 三九〇四)

七六四番歌では、「私はあなたを嫌に思わないのだが…(あなたの気持ちはどうなのでしょう)。私の方はあなたへの思いが益々強まるばかりなのです」と、「不厭」以降の後半に詠み手の心情が強調されている。二三七八番歌では、「(どうして私は)嫌に思わないのだろうか…。(あなたの態度がつかないと分かっているのにそれでも)私はあなたを慕い続けて

いるのです」と、詠者の気持ちは「戀乍居」の方を重視している。また一九五五番歌では、「厭う時はないけれども…(できれば)鳴くときは菖蒲をかずらにする日にやって来て、鳴いて渡ってくれたら(いいなあ)」と、「厭時無」以降にホトトギスが鳴く日を希望する、詠み手の心情が語られている。さらに三九〇四番歌では、「嫌だと思わわけではないのだが、…(できれば梅の)満開時に折らないと(そのまま散らしてしまうことになり)惜しいものである」と、詠者の願望は「伊登波祢」の後半にある。これらの歌から、打ち消し表現には、詠者の揺れている心の惑いを伝える表現効果があり、その後半に伝えたい本心が詠まれていると、私は考える。

このように『万葉集』では、慕う相手などを「厭わない(嫌わない)」という表現が主なのである。

尤も「厭ふ」と直截に歌う山上憶良の長歌がある。

哀世間難住歌一首并序

易集難排八大辛苦 難遂易盡百年賞樂 古人所歎今亦及之

所以因作一章之歌 以撥二毛之歎 其歌曰

…佐祢斯欲能 伊久陀母阿羅祢婆 多都可豆惠

許志尔多何祢提 可由既婆 比等尔伊等波延 可久由既婆

比等尔还久麻延 意余斯遠波 迦久能尾奈良志 多摩积波流

伊能知遠志家騰 世武周野母奈斯 (卷第五 雜歌 八〇四)

この長歌は、老いという逃れられない人間の否定的側面を詠んだ歌であると解されている。同様に老いをモチーフにして恋情を詠んだ家持、七六四番歌の明るさとは異なり、憶良の八〇四番歌には老醜(年月に伴って衰退していく身体)が詠まれている。ここでの「厭ふ」は、「人に悪まえ」の対句表現として「人に厭はえ」と受身になっており、「厭ふ」という言葉

の対象は人間である。また八〇四番歌の序には、人間の生涯において集まりやすく払いにくいものとして、『大般涅槃経』聖行品による「八大辛苦（生苦・老苦・病苦・死苦・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦）」を挙げている。徳良はこの「八大辛苦」を、古人も今の人も嘆く問題として捉え、人は生きることに伴う苦悩から逃れられないという事実を、我が身で受け止めている。人間の老いて衰えていく姿態はまさに八大辛苦の一つ、「老苦」であり、仏教思想がこの長歌の底辺にはある。

黙世間無常歌二首

生死之いよしの 二海乎ふたつのうみ 黙見しほのやま 潮干乃山乎しほひつるかみ 之努比鶴鴨しのひつるかみ

右歌二首河原寺之佛堂裏在倭琴面之

(巻第十六 有由縁并雜歌 三八四九)

この歌は、題詞に明らかなように、そして「生死の二つの海（現世の苦しみ）を厭う」という歌の内容からも、仏教思想が詠まれている。歌の言葉、「黙見」はまさに、世を避けるという仏教でいう意味を持つのである。

仏教が到来したのは、異説はあるものの、一般的には欽明天皇の十三年（五五二年）と言われている。『万葉集』の時代からその「世を厭う」歌が詠まれているわけである。その場合でも、「厭ふ」という言葉を直截的に詠んでいる歌は多くはない。先述の徳良の歌（八〇四）は、厭われる対象は老人であり、生きにくい世間を嘆く歌である。さらに三八四九番歌では厭う対象は無常の世の中であり、その心情が詠まれているのである。この二首以外は、すべて、「厭ふ」を打ち消す表現で用いており、しかもその中心は恋の歌が多いのである。しかし例は少ないながらも、『万葉集』の時代に世の無常を「いとふ（厭ふ）」という言葉が用いられているところに注目したい。人間の苦悩の中でも徳良の関心は、八〇四番歌では「老

苦」であった。また生きる苦悩に満ちた世の中を「厭ふ」と詠んでいるのが、三八四九番歌である。仏教観を踏まえた歌が詠まれているという事実、それは、『万葉集』時代における当時の人間の捉え方、世の中の見方を示唆しているともいえる。

三、『古今和歌集』の「いとふ（厭ふ）」

『古今和歌集』には「いとふ（厭ふ）」の語を詠み込んだ歌が十首ある。そのうちの五首は「題しらず」「読人しらず」の歌である。つまり『万葉集』末期の歌と見てよいものである。

題しらず

見てもまたまた見まくのほしければ馴るるを人は厭ふべらなり

(巻第十五 恋歌五 七五二)

題しらず

梅の花見にこそ来つれ鶯のひとくとくと厭ひしをもる

(巻第十九 雑林歌 一〇二二)

題しらず

いとほるるわが身は春の駒なれや野飼ひがてらに放ち捨てつる

(巻第十九 雑林歌 一〇四五)

『万葉集』では、前述のとおり、恋の歌を中心に、「厭ふ」を打ち消して用いる傾向にあり、また「厭ふ」という言葉がそのまま用いられているのは徳良の歌（八〇四）と「黙世間無常歌」（三八四九）の二首のみであり、どちらも人間の世の否定的内容を詠んだ歌であった。ところが、『古今和歌集』に載る『万葉集』末期の「題しらず」「読人しらず」の歌では、恋の歌（七五二では馴れ馴れしくなることを相手は嫌がる、一〇四五では嫌われた我が身）や、一〇二二番（鶯が人が来たのを嫌がる）にも、「厭

ふ」という言葉を直截的詠み上げ、さらに言葉の技巧をこらして採られて
いる(一〇四五の「厭はるる」と「いと晴るる」の掛詞)。「古今和歌集」
の撰者は打ち消しを伴う「厭ふ」と詠んだ歌を採らなかつたのである。か
つて『万葉集』で見られた「厭ふ」という言葉のイメージが、『古今和歌
集』においては言葉の意味よりも修辭法の一つとして採り入れられている
のである。

題しらず

読人しらず

世の中を厭ふ山辺の草木とやあなうの花の色にいでにけむ

(巻第十八 雑歌下 九四九)

題しらず

読人しらず

世を厭ひ木の下ごとに立ち寄りてうつぶし染めの麻の衣なり

(巻第十九 雑歌 一〇六八)

九四九では「世の中を厭ふ」と詠み、「卯の花」に掛けて「あな憂」と歌
い、一〇六八では「世を厭ひ」と詠んで僧衣の色を表する「うつぶし染め」
「麻の衣」など、出家を暗示する表現が見られるのである。前述のとおり
『古今和歌集』の「題しらず」「読人しらず」の歌は、万葉集の末期あた
りの歌である。従つて万葉集時代の後期から、仏教で言う「世を厭う」と
いう意が歌われているということになる。このことは、先述した『万葉集』
三八四九番に通いあうといえる。

次に、六歌仙や撰者の時代の歌における「厭ふ」の歌を見てみる。

初瀬にまうづる道に、奈良の京に宿れりける時よめる

二 条

人ふるす里をいとひて来しかども奈良の都も憂き名なりけり

(巻第十八 雑歌下 九八六)

題しらず

布留今道

知りにけむ聞きてもいと世の中は波のさわぎに風ぞ頗くめる

(巻第十八 雑歌下 九四六)

題しらず

紀 友則

雲もなく和ぎたる朝の我なれやいとほれてのみ世をば経ぬらむ

(巻第十五 恋歌五 七五三)

題しらず

そせい

いづくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ

(巻第十八 雑歌下 九四七)

題しらず

ただみね

隠れ沼の下より生ふるねぬなはの寝ぬ名は立てじ来るな厭ひそ

(巻第十九 雑歌 一〇三六)

い。ここでも、『万葉集』のように「厭ふ」を打ち消す歌い方は見られな
い。

恋の歌(九六六の相手に見捨てられた里を嫌う意、九五三の相手に嫌わ
れる意、一〇三六の来ることを嫌がらないでという意)や出家の歌(九四
六・九四七)など、さまざまな歌に「厭ふ」という言葉が使われている。
それは、これまで見た歌と同様である。また、序詞・掛詞・縁語といった
修辭的技法が歌中に多い。紀友則の七五三番歌の掛詞(「いと晴れて」と
「厭はれて」)や、壬生忠岑の一〇三六番歌の修辭法(初句から第三句ま
では「寝ぬ名は」にかかる序詞、「来る」と「操る」の掛詞、「なは(繩)」
が「くる」の縁語)といった技巧などである。

以上のように、万葉集後期あたりの『古今和歌集』の「題しらず」「読
人しらず」の歌から、『万葉集』に見られた「厭ふ」という言葉を打ち消
す歌い方はされなくなる。一方で、『古今和歌集』時代から盛んになった
修辭的技法によって、「厭ふ」の語意よりも、「厭ふ」を掛詞として用いる

ことが多くなるのである。また世を厭い出家を暗示する歌が、『万葉集』と比較すると多く入集するようになった事実も、見逃すわけに行かない。さらに『古今和歌集』における「厭ふ」という言葉には、詠者の厭世観が見受けられる。出家者（九四七番、素性法師）ばかりでなく、非出家者（九四六番、布留今道）も「厭ふ」を用いているが、詠み手が出家者であると、無常の世を避けるという意味が一層強まる印象にある。

四、『新古今和歌集』の「いとふ」（厭ふ）

『新古今和歌集』に「いとふ（厭ふ）」の語を詠み込んだ歌は二十一首ある。『古今和歌集』の二倍という多さである。その中の一首、

花落客稀といふことを

刑部卿範兼

花散れば訪ふ人まれになりはていとひし風の音のみぞする

（巻第二 春歌下 一一二五）

桜を散らした風を「いとふ」、つまり嫌うという歌である。花を散らす風を厭うという歌は、それぞれの引用と検討は省略するが、『古今和歌集』以降の勅撰集、『拾遺和歌集』（三〇・八二）、『後拾遺和歌集』（一三八・八九九）、『金葉和歌集』（七十・六〇六）、『千載和歌集』（四一八）等にも見られる。これらの流れが『新古今和歌集』に到っていることを示している。

次に恋の歌を四首見てみる。

題知らず

皇太后宮大夫俊成女

恨みずや憂き世を花のいとひつつさそふ風あらばと思ひけるをば

（巻第二 春歌下 一四〇）

片思ひの心をよめる

皇太后宮大夫俊成

憂き身をばわれだにいとふいとへただそをだに同じ心と思はん

題知らず

（巻第十二 恋歌二 一一四三）

股富門院大輔

なにかいとふよも長らへじさのみやは憂きにたへたる命なるべき

（巻第十三 恋歌三 一一二八）

恋歌として

弁

過ぎにける世々の契りも忘れられていとふ憂き身の果てぞはかなき

（巻第十五 恋歌五 一一三九三）

一四〇は、「わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」（古今・雑二、小野小町）という本歌を踏まえており、「憂き世」は辛い世の中ばかりでなく、男女の仲をも暗示した恋の歌とも見てよい。一四三は、好きな相手に慕われない自分の「憂き身」を嫌いになり、嫌うという思いだけでも相手と同じ気持ちになりたいという恋情を詠んでいる。一一二八は「なにかいとふ」と相手に訴えかけ、報われない自分の恋の辛さを「憂し」と表し、その「憂し」に耐えられない命であると歌っている。一三九三は恋人に忘れられた今となって嫌に思う「憂き身」の果てを見据えている歌である。

このように『新古今和歌集』の恋歌における「厭ふ」の語には、「憂し」や「憂き身」も共に詠まれている場合が多い。これは『古今和歌集』以来の勅撰集から見られる傾向である。さらに一一二八と一三九三の歌では、片恋によって命が絶える思いを詠み上げている。この『新古今和歌集』以前は、「厭ふ」を詠み込んだ歌に限ってみても、恋の歌において命が果てるところまで踏み込んだ歌は見られない。『新古今和歌集』の恋歌における「厭ふ」という言葉には、恋死に結びつくイメージとして用いられることがあるといえる。

一首の中に「厭ふ」と「憂し」とが詠まれているのは、恋の歌ばかりで

はない。世を厭う歌にも見られる。そして、世を厭うという歌が多いのが『新古今和歌集』の大きな特徴でもある。それも西行に四首、慈円に六首、世を「厭ふ」、世を「憂し」と歌う歌がある。これは、この二人の『新古今和歌集』の入集歌数が多いということとも関連しようが、ここではまず兩人の歌について、「厭ふ」の詠まれ方を検討してみる。

西行が「厭ふ」と詠んだ歌は、

天王寺へ詣で侍りけるに、にはかに雨の降りければ、江口に宿を
借りけるに、貸し侍らざりければ、よみ侍りける

西行法師

世の中をいとふまでこそ難からめ飯の宿をも惜しむ君かな

(巻第十 驛旅歌 九七八)

返し

世をいとふ人とし聞けば飯の宿に心とむなと思ふばかりぞ

(巻第十 驛旅歌 九七九)

題知らず

捨つとならば憂き世を厭ふしるしあらんわが身は曇れ秋の夜の月

(巻第十六 雑歌上 一五三五)

題知らず

山里に憂き世いとはん友もがな悔しく過ぎし昔語らん

(巻第十七 雑歌中 一六五九)

題知らず

世をいとふ名をだにもさは留め置きて教ならぬ身の思ひ出でにせん

(巻第十八 雑歌下 一八二八)

などである。西行と江口の遊女の贈答歌である九七八は、「世の中をいとふ」つまり出家するのは容易でないのであるからと、西行は一時の宿を断

る遊女を批判する。一方、遊女は、あなたは「世をいとふ」身だからこそ「飯の宿に心とむな」つまり現世に執着するなど切り返している。宿を借りることについて、「世をいとふ」という言葉をもとにした両者の理由付けの相違が見られる贈答歌である。一五三五では世を「捨」て、「憂き世を厭ふしるし」を望むほど、西行の心情は秋の夜の月に魅了されるといって率直な気持ちを詠んでいる。一六五九は「山里」「憂き世をいとふん」から、出家遁世生活を送っていることが分かる。(出家した今と比較すると、無為に過ごしたあの悔しい昔のことを語ろう、その話相手として西行は「憂き世をいとふん友」を求めている。しかし実際にはそのような友はいない。一八二八は、「世をいとふ」出家を「名」、評判としてとらえ、その「名」を我が身の思い出ししようと詠んでいる。

西行は、出家遁世するという意味で「厭ふ」を用いていることが分かる。ところが西行は、「世を厭ふ」と詠みながらも、旅先で遊女に宿を要求する(九七八・九七九)、秋の夜の月に趣を持つ(一五三五)、友を希求する(一六五九)、出家という評判について心の内を語る(一八二八)など、世俗とつながりがある歌を詠んでいる。つまり西行にとって「世を厭ふ」とは、世間と関わりを絶つというよりも、世俗における「出家」という立場に示しているとも言える。西行は出家者である。世を厭いなながらも世俗と関わりを絶つをえないう自分、そしてそこから生じる人間の揺れる感覚を、ごまかさず直截的に詠んでいる。それは西行は出家者という立場以前の人間の心情に価値を見出しているからであろう。それゆえ西行の「世を厭ふ」歌には、出家に対する独自の見方が含まれたものになっているのである。

一方、慈円の歌は、

題知らず

前大僧正慈円

年の明けて浮世の夢の覚むべくは暮るとも今日は厭はざらまし

(巻第六 冬歌 六九九)

題知らず

世の中を心高くも厭ふかな富士の煙を身の思ひにて

(巻第十七 雑歌中 一六一四)

題知らず

草の庵をいとひてもまたいかげん露の命のかかる限りは

(巻第十七 雑歌中 一六六一)

五十首歌の中に

いかにして今でも世にはありあけのつきせぬものをいとふ心は

(巻第十八 雑歌下 一七八三)

題知らず

世をいとふ心の深くなるままに過ぐる月日をうち数へつつ

(巻第十八 雑歌下 一八二四)

題知らず

なにゆゑにこの世を深くいとあぞと人の問へかしやすく答へん

(巻第十八 雑歌下 一八二六)

などである。六九九は、年が改まつてもこの世の迷いが覚めることのない、日々迷いに満ちた辛さを詠んでいる。一六一四は、世を強く厭い、掛詞と縁語とで仏道修行に燃える思いを詠んでいる。一六六一は、草庵を結んだ出家者の心情を歌にしている。世を避けて出家するが、その草庵生活も「生」というものに執着した生活を送らざるをえない。そのような草庵生活に嫌気をさして避けたとしても、命が続く限り、露のようににはかない己の命に自分は執着しているため、「また」どうすることもできない。自己の命を見つめる慈円の思いである。一七八三は、世を厭う心は尽きないけ

れども、有明の月を眺めてその美しさに心捉えられる心情を「厭ふ」と歌っている。一八二四は、世を避ける思いが深くなるにつれて、過ぎていく月日を数えている矛盾を詠んでいる。世を厭うならば月日という觀念に執着しないはずであるのに、いまだに日々を数える心情から脱することができないという慈円の迷いがある。一八二六は、世を厭う理由を他人に問いかけてほしい、容易に返答しようと思つて、容易に答えられないのだ、という意の間には、世の捨てにくさを思つて、容易に答えられないのだ、という意を暗示しているのではないか」という見解がある。そのような解釈が可能であろう。それは、今まで見てきた慈円の歌には、世を捨てつつ捨てきれない我が身を顧みる心情が詠まれているからである。

それは一六六一・一八二四の歌からも分かる。また世を厭う気持ちはあるものの、月の美しさにも心を奪われることを敢えて詠む、慈円の世に執着する揺れる思いが見られる(一七八三)。何故「世を厭う」のか。それは後世の浄土を祈願するためである。しかし仏道修行をしつつも、生きることそのものが迷いに満ちている。慈円自身はその迷いから解放されずに自問自答の中にいることを詠んでいる、と思われる。

このように慈円の歌には、出家や仏道修行に対して理想と現状の心の葛藤を歌ったものが多い。仏道修行に対する志を富士山の高さに重ねているところから(一六一四)、仏道への思いの強さ、理想の高さが分かる。一方ではその修行を経てもつきまとわれる迷いが、慈円に心の葛藤を生じさせる。慈円にとって「世を厭ふ」とは、世を避ける・出家生活を送るという意味である。その出家とは、まさに後世を願ひ、仏道修行に身を投じることである。それゆゑ慈円の歌には、仏道に対する強い思いや己に対する厳格さが漂っている。また西行の歌と比較してみると、慈円の歌には縁語(六九九・一六一四・一六六一)や掛詞(一六一四・一六六一・一七八三)

など修辭的技巧を駆使した歌が多い⁽¹⁾。それは『古今和歌集』の特徴と関連する。西行は自然の中で暮らす出家者の素直な心情を詠み、慈円は仏道修行という立場を踏まえた上で、出家者としての在り方を求める心情と現状を詠むのである。

このことから、同じ「世を厭う」という捉え方ではあるが、西行と慈円とはそれぞれ意味することが必ずしも同じでないことが分かる。これは世を厭うと歌う歌にも、詠み手によつて差異が生じてきたあらわれといえる。

何故西行と慈円とは、世を厭うに對して異なる捉え方をしているのか。まず挙げられるのは、同じ出家者ではあるものの、仏教社会における出家という立場か否かということである。西行は、出家動機に關して諸説があるが、北面の武士という身分を捨てて出家した。一方慈円は、正嫡以外の男子を出家させて京畿の寺社に入れるという貴族社会の風習に従つて、仁安二(一一六七)年、十三歳で出家・得度した。それは自發的に道心を求めたのではなく出家者として生きることを、慈円の家系、藤原家から定められたものである。さらに建久三(一一九二)年、慈円は権僧正に任ぜられ天台座主を補任し、翌年後鳥羽天皇の護持僧に補せられた。以降兄兼実の尽力による政界との関わりや、「大歌聖たる才⁽¹⁾」を有した後鳥羽天皇との結びつきなどを経て、慈円は晩年に到るまで仏教界に君臨するのである。さらに慈円寂後もその十三回忌に四條天皇より慈鎮和尚の諡号を賜られるほどであった。西行の仏教社会から離れた生き方に比べると、慈円の生き方は、天台座主という身分・立場から解放されず、最期まで学問僧であり続けたのである。さらに護持僧として、朝廷や天下の平和を祈禱し続けた生涯であった。そのような立場によつて、「世を厭ふ」に對する姿勢も両者は自ずと異なっているのである。

次に考えられるのは、各の立場を踏まえた歌の相違である。西行は自らの意志によつて北面の武士という身分を捨てて出家した。「憂き世を厭ふ」草庵生活を送りながらも世俗とつながりを持ち、自然を愛し、友を求めた。西行の「世を厭ふ」歌には、出家者という立場よりも人間の情感に価値を置く西行の真意が込められている。一方慈円は仏教社会における出家者であり、天台座主としての身分に適した生き方を求められた。優秀であり求道精神が強い慈円であるため、出家者・非出家者に關わらず、人間である限り生に執着せざるをえないという本質を見抜き、そのことを意識し続けた。求道者としての生き様、迷いや葛藤にこそ、慈円の「世を厭ふ」という歌に託した思いである。さらに西行よりも歌に修辭的表現が用いられていることが多いところも、歌に對する姿勢の相違であろう。

尤も、西行や慈円といった出家者だけでなく、「世を厭ふ」歌を詠む詠者がいる。巻第十八、雑歌下、一八四一番八条院高倉の、
憂き世をば出づる日ごといとへどもいつかは月の入る方見ん
などの歌である。八条院高倉(生没年未詳、嘉禎三(一一三三)年に六〇余歳で生存)は、鳥羽院の皇女八条院に出仕、若い頃から厭離の志があつたと伝えられている。西行や慈円は、このような「世を厭ふ」と詠む人たちの中で、特にそれを強く表出した人なのである。

以上、『新古今和歌集』の頃には、それまでも詠まれた「憂し」や「憂き身」を厭う恋の歌や、『拾遺和歌集』・『後拾遺和歌集』・『千載和歌集』から見られる風を厭う歌などでもないではないが、特に「世を厭ふ」と歌う歌が多くなり(世を厭う歌は他にも一四七六・一六二〇・一七五三がある)、出家者・非出家者に關わらず、厭離の歌を詠む者が現れる。もはや「厭ふ」は「世」と共に使われる歌が主流になつていたのである。『新古今和歌集』においても、修辭的表現を用いて出家者・非出家者は世を厭う歌

を詠んでいた。しかし『新古今和歌集』には、「いとふ(厭ふ)」という言葉の捉え方に字義以上の意味がある。仏道に対する眼差しの強さ、切実な思い、葛藤などが強く歌われている。

このような歌が歌われるようになった背景は、当時の末法思想が投影していると考えられる。井上光貞氏によると、末法初年の時期は永承七(一〇五二)年を有力説としている。政治は治暦四(一〇六八)年、後三条天皇の即位によって摂関外戚体制は崩壊し、親政へと移る。その親政は後に院政を生む基盤となるのである。さらに白河院は武士を政権の武力に積極的に取りこむようになり、院の近臣にまで上昇を遂げた源平両氏は、やがて政治に関与してくるようになる。一方、比叡山でも山門寺門兩派の衝突が起こり、法師たちは僧兵として武装するに到る。骨肉相殺傷の保元の乱(一一五六年)以後の武士の争乱、さらに安元三(一一七七)年の京都の大火、養和元(一一八一)年の大飢饉、元暦二(一一八五)年の大地震などによって国は混乱に陥り、人々は不安にさらされていく。天皇・貴族・民衆・武士・出家者など、あらゆる階層で「この世で生きることへの不安」「いかに生きていけばよいのか」などの問題を抱えるようになる。「形式化された信仰」ではなく、真に生きる思いを来世に託し願うのである。このような時代を背景として各の心情を込めて詠まれた歌が、『新古今和歌集』時代の「世を厭ふ」歌なのである。そこには末法の世が眼前で展開されることを見据えた本当の信仰を希求する彼らの苦悩、理想に燃える思いや喜びなどといった情感が見られるのである。

五、まとめ

私撰集・歌合・私家集等の和歌資料にも「いとふ(厭ふ)」という語を詠んだ歌は数多く見られる。本稿においては、それらについては、紙幅の

都合で省略し、『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』という流れを考察してきた。『万葉集』では「厭ふ」を打ち消しする言い方で使われている点に特色がある。『古今和歌集』では直截採り入れた修辞表現(掛詞)で用いている。『新古今和歌集』の時代では、世を厭う歌が広く詠まれるようになる。このような大きな流れが明らかに出来た。

尤もこの仏教思想を内包する「世を厭ふ」という表現は、早く『万葉集』の頃から用いられていた。時代によって修辭的技巧や歌に対する理念などに差異が生じてくるが、歌はやはり時代を投影した人々の心情を映している。無常の世を厭う心情が、『万葉集』の時代から『古今和歌集』の時代を経て、『新古今和歌集』の時代ではそれが最も広く詠まれ、西行と慈円とに見たように、そこに各の立場を重ねて詠まれている。それは時代の混乱に煽られながらも真摯に生きる人間のひたむきさが表れているのである。

【注】

- 1 七首とは、七六四・一九五五・二二七三・二三七八・三七五六・三九〇四・四〇三五番歌である。
- 2 小川靖彦「万葉集全作者事典 山上臣憶良」稲岡耕二編『別冊国文学 万葉集事典』二二二頁
- 3 辻善之助『日本仏教史第一巻上世篇』(岩波書店、一九四四年)三六頁
- 4 「厭世間無常歌二首」のもう一首、三八五〇番歌、
世間之 繁借塵尔 住々而 将至國之 多附不知聞
この歌で、世間を「借塵」に例えているところからも、仏教親に基づいて歌われていることが分かる。
- 5 小沢正夫・松田成穂校注・訳 新編日本古典文学全集『古今和歌集』(小学館、一九九四年)によった。
- 6 小沢正夫『和歌大辞典』『古今和歌集』
- 7 峯村文人校注・訳 新編日本古典文学全集『新古今和歌集』(小学館、一九九五年)によった。
- 8 カッコの中は歌の番号である。新日本古典文学大系によった。なお、『千載和歌

9 集』四一八は、葉を散らす風を厭う歌である。例えば、『後撰和歌集』の巻第十一、恋三の七五一番

題しらず

伊勢

厭はるゝ身をうけはしみ何時しかと飛鳥河をもたのむべら也

「憂し」ではないが、同様の意「憂ふ」を用いている。また、『千載和歌集』

題不知

藤原隆親

いとほるゝ身を憂しとてや心さへ我を離れて君に添ふらん

(巻第十三 恋歌三 八三〇)

恋の歌とよめる

祐盛法師

つらしとて恨むるかたぞなかりける憂きをいとふは君ひとりかは

(巻第十五 恋歌五 九三二)

など、「厭ふ」と「憂し」が詠まれていることが分かる。

11 10 新編日本古典文学全集『新古今和歌集』五二八頁

六九九は「夢」が「明く」と「暮る」の縁語であり、「暮る」は「明く」の縁語である。一六一四は「思ひ」の「ひ」に「火」を掛けており、「富士」が「高く」と縁語になっている。一六六一は「露」は「草」の縁語で、「かかる」は露がふりかかる意味を掛けており、「露」の縁語である。一七八三は「世にはあり」と「有明」が掛けてあり、「つき」が「月」と「尽き」の掛詞になっている。

桑原博士氏は、「一、一般厭世説、二、恋愛原因説、三、政治原因説、四、総合原因説」を西行の出家動機としている。『西行物語 全訳注』五六・五七頁(講談社学術文庫、一九八一年)

12 多賀宗準『人物叢書 慈円』十八頁(吉川弘文館、一九五九年)

関中富士子『第二章 慈鎮和尚の伝記』『慈鎮和尚及び拾玉集の研究』三十頁(ミツル文庫 一九七四年)

13 風巻景次郎『新古今時代』『慈鎮和尚の歌に対する態度』(塙書房、一九五五年) 二八八頁。なお旧字は新字に直した。

14 13 谷山茂『第三章 新古今の歌人』『新古今の歌人』(堀川書店、一九四七年)(引用は『谷山茂著作集五 新古今集とその歌人』(角川書店、一九八三年)によった) 三〇九頁

15 井上光貞『撰閑政治の成熟と天台浄土教の隆起』『日本浄土教成立史の研究』(山川出版社、一九六五年)(引用は『井上光貞著作集第七卷』岩波書店、一九八五年)によった) 一一八頁

16 橋本義彦氏によれば、院政はいくつかの段階を経て次第に本格化し、定型化したと述べている。『貴族政権の政治構造』『岩波講座日本歴史4 古代4』(岩波書店、一九七六)

17 橋本義彦『貴族政権の政治構造』三九・四十頁

18 村山修一『比叡山の組織と環境』『比叡山と天台仏教の研究』二〇頁

19 村山修一『比叡山の組織と環境』『比叡山と天台仏教の研究』二〇頁

21 辻善之助『日本仏教史第二卷中世篇之一』(岩波書店、一九四七年)一〇九〜一五頁

(こじま ゆき 東京都立篠崎高等学校 教諭)